

# ラテンアメリカの インフレーションの理論的分析

西 島 章 次  
(神戸大学)

本報告は、ラテン・アメリカのインフレーションの発生とその波及プロセスを理論的に分析するが、いわゆるラテン・アメリカのマネタリズムと構造派理論の1つの総合化を試みる。この総合化は、2つの理論の基本的相違が、マネタリストが需要面を、構造派が供給面をそれぞれ重視していると認識することに基づく。したがって、標準的な総需要・総供給の枠組みに両者の論点を取り込むことによって分析される。

ところで、ラテン・アメリカの超インフレを分析するには、単にインフレの原因の分析だけではなく、インフレの波及プロセスと粘着性(inertia)の問題を扱うことが必要である。インフレ波及に対しては貨幣供給のアコモディション、為替レート・賃金調整におけるインデクセーションなどの制度的要因を重視する。インフレの粘着性に対しては、調整に時間的ラグを伴うインデクセーションを導入することによってこれを分析する。

モデルは合理的期待形成を仮定した確率的マクロ・モデルであり、短期と長期の均衡価格に対しマネタリストと構造派の要因がどのような効果をもち、また政策ルールとして特定化された制度的要因がインフレ波及プロセスとしていかに機能するかが分析される。詳しいモデルと結果は当日配布されるが、あえて言及しておけば、本報告の目的はマネタリストと構造派の論争に何らかの決着をつけようとする性格のものではなく、両者の主張点を融合させようとする試みに他ならないことを断っておく。